公開講座「ことばの世界・世界のことば」

ドイツ語－歴史と地域的多様性－

ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻　松尾　誠之

文中の＜　＞は言い換え、もしくはドイツ語の意味を表す。

1. 序
2. ドイツ語史概略
3. 高地ドイツ語子音推移
4. ウムラウト
5. 地域差
6. ドイツ語の使用地域
7. ドイツという名称
8. 二重母音化
9. 参考：英語とドイツ語

1. 序

ゲルマン民族大移動期の後、現在のドイツの地に各部族が定住した。その部族語から後の方言が生まれ、またその後の東方植民等によるドイツ語圏の拡大があり、そのような中で方言同士の相互影響があった。現代標準ドイツ語は多様な方言がある中で、中部・南部ドイツ語を基に極端な方言形を排除しつつ融合してできあがった共通語であると言うことができる。しかしながらかつて神聖ローマ帝国と称したドイツには、中世末期から近世にかけて300に及ぶ領邦国家が存在し、隣国フランスにおけるパリのような政治・文化の中核となる大都市がなかった。これがドイツにおいて言葉の標準化を遅らせたことは否めない。1871 年ドイツ帝国が成立した後の 1872 年にようやくドゥーデンによる「ドイツ語正書法」、1898 年には発音の基準を示すズィープスによる「ドイツ語舞台発音」が公刊された。

現在でも全体としてなまりのないドイツ語を話す人がちょっとした点で出身地の特徴を表すこともある。例えば gelegt（< legen＜置く＞の過去分詞）は標準ドイツ語ではゲレークトと発音するのだが、これを北ドイツ出身者はゲレーヒトのように発音する。前首相のシュレーダーもそうであった。一方南独出身者には語末の-ig イヒをィクと発音する者がいる。例えば観光名所として有名なノイシュヴァーンシュタイン城を建てたバイエルン国王 Ludwig ルートヴィヒ II 世も地元バイエルンではルートヴィクと発音されることが多い。また北ドイツ人は語頭の sp-,st-をシュプ、シュトゥではなくスプ、ストゥと発音することが昔から知られており、哲学者ヤスパース（1883－1969）がそうであったし、40 年近く前にツェレ（ハノーファーの北東、木組みの家で有名な町）で町のガイドをしてくれた年配の婦人もそうであったが、現在ではあまり聞かれないようである。

北独では方言が衰退していると言われるが、南独、特に田舎では仲間内の会話は方言で行われることが多く、そうなると何を話しているのか我々にはまるで分からない。

2. ドイツ語史概略

ドイツ語の歴史を述べる前に断っておかなければならないことは、近代初期に至るまで公的・学術的な文書の多くはラテン語で書かれた、ということである。ルターなどもラテン語で書いたものが少なくない。学問の世界はラテン語で行われていたのである。初めてドイツ語で講義を行ったのは哲学者・法学者であるクリスティアン・トマジウスとされるが、それはようやく 1687 年になってのことであった。但しその彼ですら主著はラテン語で書いている。

古ドイツ語資料はドイツ語研究には貴重な資料であっても、ドイツの歴史資料総体から見れば部分的なものでしかないということは確認しておく必要があるだろう。

古高ドイツ語（750－1050）：ゲルマン民族大移動期の後、現在のドイツの地にゲルマン諸部族が定住した。当時「ドイツ語」として書かれたものは各部族の言葉を反映している。ある程度の量のある作品としては福音書の翻案・翻訳 2 種があるだけで、その他は小さななものにとどまる。当時はまだ共通の「ドイツ語」という意識はなかった。870 年頃にエルザスのヴァイセンブルク修道院で「福音書」をドイツ語（南ラインフランケン方言）で書いた修道士オットフリートは自分の言葉をフランケン語と呼んでいる。現在の deutsch＜ドイツの、ドイツ語の＞は当初ラテン語文献に現れる thiutisc-という語に由来するが、この語はラテン語に対して「民衆語の」を意味した。オットフリートもラテン語で書いた部分ではこの語を使用している。この他に古低地ドイツ語＜古ザクセン語＞で書かれた、ゲルマン的色彩の濃厚な救世主伝がある。

中高ドイツ語（1050－1350）：この時期には騎士文学が盛んで、例えばゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは 1210 年頃「トリスタンとイゾルデ」の叙事詩を書いた。この時代は大詩人の多くが南ドイツ出身者であり、当然その方言が基礎にあるが、極端な方言形は避けられている。そのため詩人語と言われるような、最大公約数的な言葉の世界を作り上げている。19 世紀以来の校訂本正書法があり、公刊されている印刷本ではかなり規格化された読み易いものとなっている。

初期新高ドイツ語（1350－1650）：騎士社会の衰退、都市の興隆を背景にドイツ語の使用領域は文学作品のみならず、実用的な文書にまで及ぶこととなった。例えば証文がラテン語でなくドイツ語で書かれることは既に 13 世紀から始まっているが、14 世紀に入るとその量が著しく多くなる。同時に地域限定での使用領域が拡大したため、方言差も露わとなる。しかし印刷術の発明により出版業が起こり、出版業者は他地域でも販売するため、方言色を薄めようとする動きもあった。ルターの聖書翻訳は確かに大きな文化的事件ではあったが、歴史の教科書等でしばしば言われるような、それによって現代ドイツ語の基礎が置かれた、というような言い方は適切ではない。ルターのドイツ語、およびその聖書のドイツ語は当時のドイツ語の発展過程を反映したものであって、彼が独自にドイツ語を作り出した、というようなことはないとされている。ルターは成長過程で低地ドイツ語地域と中部ドイツ語地域との両方を経験しており、ドイツ語の多様性に対して敏感にならざるを得なかった事情がある。また聖書の翻訳も版を改める際に語の差し替え等による相当の変更があり、より広い地域に受け入れられるように努力している。それでも南ドイツで出版されたときには巻末に語彙集が付けられたり、低地ドイツ語地域では低地ドイツ語に直した版が出版されたりした。

16 世紀後半以降、文法書・各種辞書がでるようになり、書き言葉が徐々に統一されていった。それらは皆民間人の手になるものであった。当時の皇帝はウィーンを本拠とするハプスブルク家が世襲していたが、言語的には影響力を持つことがなかった。

ドイツ語の統一化といっても、それは書かれたドイツ語のことであって、発音となれば方言差

は簡単にはなくならなかった。シラーは終生なまりが抜けなかったと言うし、ゲーテにしても、例えば有名な「野バラ」で Röslein auf der Heiden と Sah's mit vielen Freuden とにおいて Heiden と Freuden とで韻を踏ませているが、これは彼が Freuden を方言形 Freiden と発音・理解していたことを示している。

3. 高地ドイツ語子音推移

ドイツ語は系統的にはゲルマン語、特に英語・オランダ語などと同じく西ゲルマン語に属する。英語はドイツ北部にいたザクセン人等がブリテン島に持ち込んだ言葉であり、大陸に留まったザクセン人等の話す低地ドイツ語とは本来極めて近い。

現在教室で習うドイツ語＜高地ドイツ語＞は中・南部方言を基にしているが、これは元来の p, t, k の子音を pf, f; tz, ss; ch のように破擦音、摩擦音に変えている。これを高地ドイツ語子音推移という。この変化は南部に起こって、北へ行くに従って弱まり、低地ドイツ語は古い p, t, k を維持している。英語も低地ドイツ語と同様である。

例えば北の港湾都市ハンブルクには Planten un Blomen という庭園があるが、これは標準ドイツ語では Pflanzen und Blumen＜植物と花＞となる。すなわち p>pf, t>z となっていることが分かる。Pflanzen, Planten は英語の plant-s で、子音の状態は低地ドイツ語と英語で同じであることが分かる。この語はラテン語の planta〔但しラテン語としての意味は「植物」ではなく「苗木、接ぎ穂」である〕がゲルマン語に取り入れられたものである。このように古く取り入れられた語は本来のドイツ語の単語と同じく、音変化を受ける。

Wittenberg ヴィッテンベルクはルターが活動した町として有名であるが、Witt-は英語の white と同じく、「白い」を意味し、低地ドイツ語であることを示す。これに対し、エルザス地方（現フランス領）にある町 Weißenburg（フランス語名：Wissembourg）では高地ドイツ語 weiß の語形になっており、t > ss と子音推移が生じている。またグリム童話にある白雪姫は Schneewittchen であるが、ここで-witt-となっているのは低地ドイツ語形であり、この話の採取地が低地ドイツ語域であることを表している。高地ドイツ語ならば weiß となるところである。

4. ウムラウト

ゲルマン語の語頭アクセントにより、語尾の i, j が先行する語幹の母音を同化させる現象。

alt ＜古い＞– älter〔比較級〕(< altir) ；Mann＜男＞ー Mensch＜人間＞(< mann-isco)

この現象はゴート語を除く全ゲルマン語に現れ、英語にも old – elder; mouse – mice; sat(< sit) – set のような例が見られる。

ウムラウトは北部から南へ拡がった。従って北の方でより強く現れる。南では生じないことがある。

例　地名：Osnabrück – Innsbruck; Rucksack（リュックサック）〔南独形。標準語で背中は Rücken と言う。〕 drücken（押す） – drucken（印刷する）〔両者とも元来は「押す」の意。後者は南独形、印刷術の発明とともに意味が特殊化した。〕

5. 地域差

5. 1. 土曜日の呼称 Samstag と Sonnabend

私が 1967 年に大学に入ったときには、土曜日は Sonnabend、但し南では Samstag とも言う、

と習ったと記憶する。しかし数年後、ドイツ人の先生（北ドイツ出身）との話で、私が「Sonnabend より Samstag を目にしたり、耳にしたりすることの方が多いように思いますが」と質したとき、先生は「単語としても短いしね」とその事実を認めておられた。確かに民法などの法律では Sonnabend が使われ、旧東独では Sonnabend が公式名称であった、というようなことはあるが、現在では Samstag が一般的で、Sonnabend は北ドイツで使われる、と言うのが事実に近い。また「土曜日の晩に」は Samstag を使えば am Samstagabend で問題がないが、Sonnabend を使うと am Sonnabendabend というように-abend-abend の繰り返しが起こり、聞き苦しいというようなこともある。Google（ドイツ語版）で Sonnabend を検索してみると、殆どが北独のメディアと MDR（中部ドイツ放送、ザクセン）に現れる。またミュンヒェンで発行されている週刊誌 Focus に Sonnabend が使われていることが分かるが、Focus 内部で検索してみると Sonnabend が 69 件であるのに対し、Samstag は 9990 件あり、やはりこちらの方が圧倒的に多い。なお Sonnabend とは Sonntagabend の意で、「日曜日の Abend」ということである。これは昔は日没が 1 日の開始の起点であったことを示している。ちなみにクリスマスイヴの eve イヴは現在では「前夜、前日」と解されているが、eve は evening と同じ事で、元来は上に述べたように日没から次の日没までを 1 日とする考え方に基づいているのである。

5．2．指小辞-lein, -chen

グリム童話に「Hänsel und Gretel ヘンゼルとグレーテル」の話がある。ここで-el は指小辞-lein の方言形で、強いて訳せば「ハンスちゃんとグレーテちゃん」とでもなるところである。-lein,-el は南独系である。南独シュヴァーベン地方の民謡で、別れの歌「ムスィデン」というのがある。その Muss i denn, muss i denn / zum Städtele naus, ＜僕は町へ行かなくちゃならないんだ＞で Städtele の-le もやはり-lein の異形である。これに対し、-chen は北独系で、先に述べた白雪姫 Schneewittchen と符合する。ドイツ語では「女の子」が女性ではなく、中性だそうだ、とからかい半分で話題になることがあるが、これは Mädchen と指小辞-chen が付いているためで、-chen が付けばどんなものでも中性名詞になるというだけのことである。南独形は Mädel である。但し、現在では北中部で書かれたものにも見かける。かつてナチスの青少年組織ヒットラーユーゲントには女子部があり、Bund Deutscher Mädel＜ドイツ少女同盟＞と言った。

5．3．発音

発音にも地域差がある。例えば

ケルン・ベルリンの方言では

Guten Morgen! ＜おはよう＞ グーテン・モルゲン が ユーテン・モルイェン となる。

愛知万博ドイツデーの際、ケルンから来たカーニバル・グループのリーダーが Opjepas! ＜気をつけ、用意＞＜標準語：aufgepasst (aufpassen の過去分詞)＞と号令をかけていた。

このような閉鎖音[g]と半母音[j]との交替はドイツ語・ゲルマン語ではしばしば見られる。

比較： 英語 yester-day, egg ⇔ ドイツ語 gestern, Tag, Ei

ベルリンでは Bad＜風呂＞ バット（標準語：バート）という発音を耳にする。

オーストリアでは

durch＜…を通って、…によって＞ [dʊrx]ドゥルフ （標準語：ドゥルヒ[dʊrç]）

ドイツ南西部では gestern＜昨日＞ゲシュタァン（標準語：ゲスタァン）

スイスでは

Schwyzer Düütsch シュヴィーツァー・デューチュ（「二重母音化」を受けていない）＜スイス・ドイツ語＞ ⇔ 標準語：Schweizer Deutsch シュヴァイツァー・ドイチュ

北ドイツでは ē[e:]と ä[ε:]の区別がない。北ドイツの都市リューベックはかつてのハンザ同盟の盟主であったが、ここをを舞台にしたトーマス・マンの小説『ブッデンブローク家の人々』（Buddenbrooks）には denen＜指示代名詞・複数 3 格、彼らに＞ と Dänen＜デンマーク人> とを取り違える話が出てくる。

5．4．語彙・表現の違い

南ドイツ Grüß Gott! ⇔ 一般 Guten Tag!＜こんにちは＞

バイエルン・オーストリア heuer＜今年＞ ⇔ 標準語：dieses Jahr

オーストリア Jänner イェンナー＜1 月＞、Feber フェーバー＜2月＞

⇔ 標準語：Januar ヤヌアール, Februar フェブルアール）

スイス（フランス語の影響）

Billett ビリェット＜乗車券＞ ⇔ 標準語：Fahrkarte ファールカルテ

Merci メルスィ＜ありがとう＞ ⇔ 標準語：Danke ダンケ

スイスは小さな国だが、山がちのこともあり、その内部で方言差が大きい。例えば

スイス一般»Grüezi« ⇔ ベルン Grüessech«

というようなことがある。

5．5．地名の地域差

ドイツの東部を流れるエルベ川以東の地名にはスラヴ起源のものが少なくない。例えば Leipzig ライプツィヒがそうである。これは旧東独にあって、ゲーテなども学んだ古い大学があり、岩波文庫の範となったレクラム文庫はここで出版されていた。元来スラヴ系のソルブ人の居住地。1430 年までは Libiz, Lipz, Liptzick 等の形で文献に現れる。古ソルブ語 lipa（チェコ語 lípa 参照）＜菩提樹＞に由来する。

ドイツ語は原則として語頭にアクセントがあるが、東部地域には語尾の-in イーンにアクセントを持つ Berlin, Schwerin のような地名がある。

6．ドイツ語の使用地域

ドイツ、オーストリア、スイスのドイツ語圏が主なもの。これに隣接する地域で南チロル（イタリア領）、アルザス（フランス領）、ベルギーの一部がある。第 2 次世界大戦の結果失われた主なドイツ語地域：ポーランド西部、東プロイセン（現ポーランドおよびロシア領。カントのいたケーニヒスベルク＜ロシア語名：カリーニングラート＞はここにある。）、シレジア＜ドイツ語名：シュレーズィエン＞（現ポーランド領。オーストリア継承戦争の際にフリードリッヒ大王のプロイセンがマリア・テレジアのオーストリアからその大部分を奪ったもの。中心都市ブレスラウ＜ポーランド語名：ブロツワフ＞。作曲家ブラームスに「大学祝典序曲」という作品があるが、これは 1879 年にブレスラウ大学から名誉博士号を送られた際に返礼として作曲したもの。） また現在のチェコには戦前まで、スイスのドイツ語人口よりも多い、数百万のドイツ語系住民がいた。プラハにはカフカのようにドイツ語で執筆するユダヤ系作家がいた。

トランスィルヴァニア（ドイツ語名ジーベンビュルゲン。現ルーマニア領。）には 12 世紀以来入植があり、現在でもドイツ系住民がいる。ドイツで犯罪を犯した少年たちが更正のため、この地の農家に送られているというようなこともある。2009 年にノーベル文学賞を受賞したドイツ語作家ヘルタ・ミュラーはここより西の、ドイツ語でバナートと呼ばれる地方の出身である。このほかハンガリーにも少数民族としてドイツ語系住民が存在する。

7. 「ドイツ」という名称 ー「民衆語の、民衆の」Theodisc- thiudisc …

東ゴート王テオドリック(ラテン名：Theodoricus、ドイツ語名：Theoderich)、人名ディートリッヒ(Dietrich) などは ahd.thiot＜民＞+ahd.rīhhi＜勢力のある＞ということである。

〔ahd.=古高＜古期高地＞ドイツ語（750－1050）〕

イタリア語でドイツ語・ドイツ人を表す tedesco はここから来ている。

英語で「オランダの」を表す dutch は deutsch < diutsch と同源。ここでも二重母音化が起こっていない。

8. 二重母音化：î > ei, û > au, iu[y:]> eu

12 世紀にオーストリア南部から始まり、北へ広がった。低地ドイツ語、スイスのドイツ語では起こらない。 〔mhd.= 中高ドイツ語＜中期高地ドイツ語>（1050-1350）〕

mhd. mîn hûs ミーン フース＜私の家＞ => mein Haus マイン ハオス

mhd. niu ニュー＜新しい＞ => neu ノイ

スイスドイツ語はこの点では中高ドイツ語の発音を維持していることになる。

低地ドイツ語でも Wittenberg, Schneewittchen の witt＜標準語 weiß＞から分かるように二重母音化は生じていない。ここでは wīt > wĭtt のように長母音が短母音に変わっている。

二重母音化に類似する変化は英語にも起こっている。ice, white の母音は i の文字が表しているように元来はイーという音であった。また house, mouse の母音は元来ウーという音であった。フランス語では ou はウーと発音するが、house, mouse の綴りにはこれが反映している。

9. 参考：英語とドイツ語

英語とドイツ語とは系統的に関係が深く、特に3. で述べたように英語と北ドイツ方言とは特に子音については同一の状況にある。ドイツ語の歴史・方言差等を見ていくときに、英語の知識が役に立つ。

9. 1. 英語の歴史にとって重要な事項

ゲルマン民族のブリテン島侵入開始	449
デーン人の侵入開始	787
クヌート王位につく	1016
デーン朝	－1042
ノルマンディー公ウィリアム（フランス語名：ギヨーム）による征服(Norman Conquest)	1066
この間、約 300 年、公的な場でフランス語が支配的となる	
議会が再び英語で開会される	1362

9．2．英語とドイツ語の同系を示す音韻対応

1）高地ドイツ語子音推移による相違：

・ p – pf, f :　apple – Apfel アプフェル、ship – Schiff シッフ、sleep – schlafen シュラーフェン（比較：Schlafsack シュラーフザック＜寝袋>）

・ t – z, ss:　water – Wasser ヴァッサー（比較：ワッセルマン(Wassermann)反応（梅毒検査））、salt＜塩> – Salz ザルツ（比較：モーツァルトの生まれた町 Salzburg ザルツブルク）、tide＜潮の干満> – Zeit ツァイト＜時間>、 town – Zaun ツァオン＜垣根>、 street – Straße シュトラーセ（ラテン語(via) strāta 舗装された（道））（時代が下って入ってきた語、例えば Karte カルテは中世末期にフランス語 carte（＜ラテン語 charta＜ギリシャ語 chártēs）から取り入れられたが、tは変化を受けていない）

・ k – ch:　cook – Koch コッホ、

2）その他の対応

・ d – t　deer＜鹿＞–　Tier ティーア＜動物＞、deep – tief ティーフ

・ th – d　thank＜感謝、感謝する＞ – Dank, danken、brother – Bruder (father, mother – Vater, Mutter となっているのは英語の方で fæder, mōdor の-d-が-th-に変化（mōdor の場合は 16 世紀から）したため。

・ gh – ch　英語では以下の例で gh が発音されないが、対応するドイツ語では ch として発音される。

daughter – Tochter トホター、night – Nacht ナハト（比較：モーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムズィーク Nachtmusik）、through – durch ドゥルヒ

9．3．英語の大きな変化

元来近い言葉であった英語とドイツ語であるが、全体として英語の方が大きく変化したため、両者の差が大きくなった。

文法的事項では名詞の性が消失したこと、格変化が消失したこと、動詞では人称変化が殆ど消滅したことなどが重要な変化である。

バイキングの侵攻による影響で、3 人称複数代名詞が北ゲルマン系の they に取って代わられた。she comes, they come. ⇔ ドイツ語 sie kommt, sie kommen. オランダ語 zij<ze> komt, zij<ze> komen. 元来西ゲルマン語では3 人称単数女性代名詞と3 人称複数代名詞が同形であった。

9．4．新語彙の作り方

語彙の点では 1066 年のノーマンコンクェストによりフランス語の影響が著しい。

また英語では術語をギリシャ語・ラテン語から作るのに対し、ドイツ語では自前のドイツ語から作ることが多く、これによって英語とドイツ語の違いが大きくなっている。

science (< ラテン語 scientia < scīre＜知っている>) – Wissenschaft ヴィッセンシャフト(< wisssen＜知っている＞)

hydrogen（ギリシャ語）＜水素＞ – Wasserstoff ヴァッサーシュトッフ＜水＋素材＞

television（ギリシャ語＋ラテン語）- Fernsehen フェルンゼーエン＜fern 遠く＋sehen 見える＞